

説 教 『破れない網』山本 護 牧師

聖 書 エゼキエル書 47：8～10／ヨハネによる福音書 21：3～14

本来のヨハネ福音書は20章で終わっている(ヨハネ 20:30~31)。ところがその後、21章が書き加えられた。21章の復活の場面、言葉としては記されていない弟子たちの微妙な表情の変化に注目しよう。

正体不明のイエスから(21:4)、「何か食べる物があるか」と問われた弟子は、陰鬱に「ありません(21:5)」と力なく答えた。次は、驚きと喜びが混じり合った表情と滑稽な行動(21:7)。そして最後は、早朝の清々しい空気の中の充実した沈黙(21:12)。変化していく弟子たちの表情に沿いながら、その感じを味わってほしい。こうした感触をいわば皿に見立てて、その皿に御言葉の意味性を盛りつけていこう。

「153匹の魚(21:11a)」という数は、古来よりいろいろに意味づけられたが、決定的な根拠はない。しかし「それほど多くとれたのに、網は破れていなかった(21:11b)」とは、多様なものを受け入れる教会の「剛柔」を示しているのだろう。教会は民族や言語に規定されない新しい信仰共同体であった。仮に、知られている魚が135種類あったとして、教会は世の全民族を抱えても「破れない網」だという謂か。さらに想像を拡げれば、罪人も、異教徒も、病者も、性的マイノリティも抱えうる網か。

後代の教会は「剛」に傾斜し、「柔」を失った。あるいは「剛」がなくて滅びた教会もある。どちらか一方であることは難しくない。そしてそれは、多様なことではない。多様性とは「みんな違ってみんないい」ではなく、「意見の相違や嫌悪を保証し合う」こと。多様性を実現させる剛柔は、教会の質より以前に、キリスト者個人々に由来する。両者の目標は、「破れない一つの網」を目指している。

十字架で挫折した弟子たちは帰郷した。ぶらぶらもしてられないから、一度捨てた網(マルコ 1:18)を持って漁に出た(ヨハネ 21:3a)。「しかし、その夜は何もとれなかった(21:3b)」。どうしてか。心が「うしろむき」だからではないか。だがそこで、復活したイエスによって大きな可能性が開かれる(21:6)。

「さて陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった(21:9)」。以前は弟子や女たちが食事の用意をしていた。だが復活後は、イエスが食事をご用意下さる。これはどういうことか。すなわち私たちは、直接、キリストによって養われる。羊の群れは「良い羊飼い」に養われ、キリストは命を賭して私たちを守って下さる(10:11)。キリストが復活なさった今、この比喩が、まさしく現実のこととなった。私たちの命は十字架で肩代わりされた。そして「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた(21:13)」。こうして養い導かれていく。

「川が流れていく所ではどこでも、群がるすべての生き物は生き返り、魚も非常に多くなる(エゼキエル 47:9a)」。水辺、生き返り、多くの魚。あの復活後の出会いが想像させられる。挫折して帰郷した弟子たちは、死んだも同然だった。しかしキリストと出会い、死んでいた表情はみるみる変化し、生き返った。「弟子たちはだれも、[あなたはどなたですか]と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである(ヨハネ 21:12)」。この復活の静けさ。「その魚は、いろいろな種類に増え、大海の魚のように非常に多くなる(エゼキエル 47:10b)」。教会もまた復活の命を得て、多様性を取り戻す。



【おまけのひとこと】

破れない網 その中に 雑魚の一匹として居る 気の合う群で泳いでいたなら衝突も許されまい
教会では ただ一匹の魚 ただ一人の私となって己に直面する その孤独にあってこそそのキリスト